

# 本多 徳治(ほんだ・とくじ)

## 1、プロフィール

言論人。戦前、東奥日報社従軍記者として三度中国大陸に渡り、戦線を取材した。県内各地での報告会は盛況であった。戦後、陸奥新報社長として、「陸奥新報」を創刊した。

### <生没>

1907(明治 40)年6月7日～1959(昭和 34)年6月 28 日

### <代表作>

『戦線走り書』(昭和7年9月8日発行、東奥日報社)。

『戦塵餘影』(昭和 14 年6月1日発行、東奥日報社)。

### <青森県との関わり>

弘前市出身。東奥日報社、陸奥新報社の経営に携わった他、(株)ラジオ青森で、テレビ放送開局に尽力した。

## 2、作家解説

父が青山学院に勤務した関係で、大正3年から10年まで東京で少年時代を過ごした。帰郷後、県立弘前中学校に入学したが、文武に優れた才を発揮し、標準語を話すことから一目置かれる存在であった。講演部、弘中短歌会の他、剣道部でも活躍したが、14年には軍事教練視閲に於いて堂々たる指揮法を示し、大に激賞された。15年弘中を卒業後、北津軽郡脇元村立脇元尋常高等小学校代用教員として教壇に立った。昭和5年、「東奥日報」記者竹内俊吉の推薦で同社弘前支局に勤務し、第八師団の担当記者となった。翌年、満州事変が勃発。同師団に出動命令が下り、同社初の従軍記者に抜擢される。部隊は奉天から錦州、チチハルへと転戦したが、戦線と銃後の橋渡しという役割を見事に果たした。帰国後、戦地報告書『戦線走り書』を発行し、県内各地での報告会に臨んだ。13年には二度目の従軍記者として、写真集『戦塵餘影』を発行。翌14年には同社山田金次郎社長に随行し、三度目の従軍記者の任を立派に果たした。

占領下、民主化の波は東奥日報社にも押し寄せ、当時同社の重役の一人として戦争責任を問われ退社する。21年弘前市大阪屋菓子店の一角に陸奥新報創刊準備室を設置し、初代社長となる。9月1日には「陸奥新報」創刊号を発行。しかし、翌年公職追放となり退社。その後、蓬萊ストアという小売業者の組合長などをしていたが、28年には竹内俊吉の勧誘により株ラジオ青森に勤務する。八戸・弘前市局長、放送部部長の要職を歴任し、青森テレビ放送開局に向けて尽力した。ところが、テレビ放送開局三ヶ月前の34年6月28日食道癌のため、53歳の若さで天界に召された。葬儀は株ラジオ青森社葬として、キリスト教式によって執り行われた。死後10年が経ち、弘中時代からの旧友須藤均治、黒滝俊雄らは弘前八幡宮境内に本多の顕彰碑を建立した。（「本多徳治の碑」、43年6月28日除幕。揮毫竹内俊吉。「資性明朗潤達 終生清廉清貧多くの人々を愛し さらに多くの人々に愛された」碑文の一部である。）

### 3、資料紹介

○『戦線走り書』

図書

1932(昭和7)年9月8日

190 mm × 125 mm

樺繁蔵県立弘前中学校長、山田金次郎東奥日報社長の序文に続き、本多による「僕のことば」が掲載されている。昭和6年の満州事変後、本多が従軍した旧満州新民から、四平街、錦州を経て、チチハルまでの、最前線での「本多リポート」、約80本が編集されている。